

N30a

光学赤外線大学間連携ネットワークによる δ Sct 型脈動星 IP Vir の観測

野上大作、大島誠人、加藤太一(京都大学)、山中雅之、秋田谷洋、川端弘治、植村誠、吉田道利、伊藤亮介、宇井崇紘、大杉節、笹田真人、上原岳士(広島大学)、渡辺誠(北海道大学)、永山貴宏(名古屋大学)、本原顕太郎、小西真広、館内謙、大澤亮、越田進太郎、諸隈智貴、土井守、三戸洋之、松永典之、家中信幸、青木勉(東京大学)、河合誠之、谷津陽一(東工大)、関口和寛(国立天文台)、新井彰、磯貝瑞希(京都産業大学)、今田明、黒田大介、柳澤顕史、泉浦秀行(岡山天体物理観測所)、面高俊宏、宮ノ下亮(鹿児島大学)、花山秀和、宮地竹史(石垣島天文台)、他大学間連携観測グループ

δ Sct 型星は A3 から F5 辺りのスペクトル型を持つ、主系列星かそれよりやや進化の進んだ恒星で、0.3 日より短い単周期、あるいは複数周期の脈動現象を示す天体である。IP Vir は *UBVRI* の測光標準星の観測の最中に、Landolt(1990) により発見された周期 0.066686(13) 日の δ Sct 型脈動星である。我々は今年度発足した光学赤外線大学間連携ネットワークで、2011 年 4 月 25 日から 5 月 2 日の間、IP Vir のキャンペーン観測を行った。この結果、*U* バンドから *K_s* バンドまで、可視光から近赤外のほぼ全領域での光度曲線が得られるという、貴重な観測が実現した。*U, B, V, R_c, I_c, J, H, K_s* バンドの全てで脈動が検出され、振幅はそれぞれ 0.15, 0.12, 0.10, 0.07, 0.05, 0.04, 0.03, 0.025 等であり、長波長側ほど振幅が小さかった。また光度の極小時刻について、長波長側ほど遅れる傾向が見られた。これらは δ Sct 型脈動星の典型的な挙動と言える。さらに PDM 法により脈動周期を計測してみると 0.065210(9) 日であり、脈動周期がこの 20 年で明確に減少していることが明らかになった。本講演ではこれらの IP Vir についての観測結果の他、大学間連携観測ネットワークの狙いや今後の展望についても報告する。